湖月抄

のしい本

和書門
一七七〇三 號
二一七 函
一 架
六〇 冊

内閣文庫
和書 類
一七七〇三 號
六〇 冊
二〇三 函
二 架

内閣文庫		
番號	和 17703	
冊數	60 (42)	
函號	203	32

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker
x·rite
MSCCPPCC0411
MSCCPPE0411

国立公文書館
National Archives of Japan

椎本　花以テ詞并ニ歌ヲ為ス巻ノ名ト云々　此　詞にハ椎本とこ

つゞとあり　歌ハ椎本よむなしき床になりにけるかな

まつしまへさらむのことゞもを　細　源四十八帖の正月より秋

のすゑまでかけてあり　薫の下ハ四十七帖の十二月まで也

孟　源氏四十八帖正月より末の秋つゞきまでありて

ありとし薫誕生し給へり

椎本大八云　法のこゝろにつくるしわざいとこまやかなるに　こゝにハまことにかゝる御ありさま也

宇治のかんの君ハくのこゝろやすくわたり給ふ

ことゞもそこにて年もくれぬ

細以下椎本の文母の之　地にも小宮なりすげくさ申をこそ　椎の之

まつらむ心もうけうすれなん命ひる

くゐをもうくべくこともなどふこゝろハん

として又あれどうちこの世となるれど

くおうとゞめ御悩しく若くハいそげる

わらし給ひとところもふかく侍ず

とをひとかた今一ところはまさらんとおぼ

やけまうしのこしよろこれてかのめるわ　細

どみえのかりしうつゝそのことぞうるひが

とりそうとひとり川のまつのつどとり

源氏四十八帖之

孟思義之
見づくの世の中ま愛じ
う 孟 大人之の我身ひ
こ何のうさりけり
ーー
孟 山みもあくられん
孟 いつくふる世をかへえん
ふしそ我小さ山小さいと
ふべしられ又すまく雅
つまふのわくられんーー

身を此り山ひちしてさるさつぐくれ世
中する愛じらもひあらりて後の世のとこ
るひよ母いふくすとみしとゆやしちら
のはうくことあひて我山みをあくがれ
ん人のとりとしりまうるべく此がしう
だしとぞ愛うらざ愛ふまたりはしつてゐ
しつをさつゐよる我よとうちまふべく
を見とぬりのあひの一かさすしく身より
そひふくうもん我より母ふふ誰かいつう
きらうるづくりてそこるひつうまにそ
あめれとあふよふかし人ふいなし神仏
ともかくとんりもかさい見られさんべくさこの

阿らく
これちらしく世の
を世まふよ物のうるかぬ
か飛ともみとせの松る
らるくま 六哥小町
人ふもとらしうらぶのぞ
まぬべき 細 今年く御伯
らぐ女三宮も此よゆへ
とゆがりおりとうらぬも
かあらんどうらんとく
るけの表をもうけ給人
花 女三宮のるみ 御るけ
やりの表をもうけまふ
わらんとく 細
ひと川あひよ 薫出乃
身をとさふまふさと
をひとりあひまよりて
まりうり 細
我もんを 香身の為女
三の宮乃ゆくあるうぐよ
みぐくて八年不絶とふ
とうまかし
とめしとふといふてん
細 ほの知れまおかくんう
を死後よいるをまるぞしとこ

こそあくめられも千年の松ありぬ世い
つるよとよるべきみをあしぬさかく人ふも
すうしらぶのぞれぬべき福ゆく女すけ我
とをうけ給人あらんとこそいひし何あより
りえぬるぶろしゆへとあきめてるがくへだ
そのづくあつまじさる我りうち我とん
もやそのしぬぞれいくくろやうしもある
んよりいなかしとふとい給つくんわかりよ
をまりとをゆがりゆかいそんりしまつ何の
ことい愛えのとらめふは人これさしぬべきと
ざかう又こしざ愛のおやまらずしるければ
さしばりのくありつしくこゆるつけなるひ

なとく怖もあへく
細 頼へくも思はれざる
こと〳〵にそおもれとも
師世の不義をあそ人。
なしめよりやかておち
かれんといひていせざれ
ども終にわかられて梅
るにもかひなくいたづら
に身をころし名をさへ
もらすまでで柏木まてを
あらるみし是をおもひ
て人のいましめとすれ
るべし

緒にしることの義も出きるんかど、つれ〳〵
よせりひつくらもらく〳〵しからとおちさ
なし・おどろく心どもいすくよるまし侍ら
身なきんとうきらう〳〵しおひそれくまく
らそらきぬぎらひ人へやりすてくだなり
そへつ、いうしうひまきとそへて〳〵えより
まゐる御どもわりしこれは文をまれ結・今い
りざりし女みく結おりさ御いそのづ〳〵
さうしめずやうも侍らんと、いうくすらめる
とぶすれはとざめさせ結いねまことしか
あれど、いとく〳〵を侍らるとことあゆ、ひき
じつわらてけぞ。ふつくこをられこささ

今はかく 細 終焉の詞
も此世りとまり外へ
きおひあり〳〵 孟日
愚按 是ハ身ハなりうと
あり給ひとも・女三宮にまり
むまをおく言うひそれ
のちべしとく〳〵 何 此世
ともつみをもいりまく
せんりえん物のむまの
かれて

よ・の 柏
いまはそてまえんかりもみとおれえ
ぬさいのすやのうらん、義をぢかの結つを
よ・こうろのどめらく〳〵やりするぬやそより
まじらんらの光みもとう侍らんとえて〳〵給。
給姫にも、らりず御まま義姫にはだといひとこ
せまつり、これらくも、いま一てひつふべきこ
とまんわりとのさまれは、此ひとも、わ
らうらくよまうり〳〵ひつ〳〵そ
まうあれらん、あれは明けるきん〳〵そ
うそ是、ならわれ、今いとくいつくうう
てあくる我この比なきゆゑ、されとわめ

物くさそへれバ又かさの
於女三の作りもつふかあ
まりのやうにあげをかく
よ世ある心悪さの表が
ちりハもかしあつまり
愚按　柳木のりもりとき
こうめそを表と書志
るべくのかなり

かくさ山より
河海に役行者葛城り
をあかるをひそり只䍃
まそもあるんりし

一かくさ山ハ昔仙人なと
住し　一本之

みるこそ作れと笑出れバまこれもたふかあ（細言あ作自之）
まつのからしして物ぐさ得て多ればあかれり
この表ならりいゆりひ志つあれど、いとくに（柳木のあり）
うらこしもとひとりめしりハいとくじうあん（を深ふちつれ多るらえ）
つくおりとをてざつゝかのい絡ごす、作仏の（細若子ゆへ之）
おどの川みくづしやりかるゆはおもくね（孟女三の事もくしつくめくるし）（柳木のるすを）
どかくつりげかある人の作るしさの都りく（細深し）
よまあるゝねぐハてゆそうしとび（おくよなのかりしうえやまつゝ之）
さかりくへしされど作砚あどすふるひて（小作後の作ありとむしらく）
をわ笑ゆれバ志かくよかいま紙とりて志（女三の）（小作後作之す）
のびてしひのまうされ本りしこふ来りぬ（をとりて柳木へ来のを）
やくじんりしこさそかゝひへかくさ山よ（細父ゆくそ）

里へくだりじ出てあり、福らけあそて、加藤新くさを（請ダイム）（クチ）
んとくし絡作修法読経あすとも、いとゆどろ
ゆどろくしらつさらりん人の中はまくす、
まあぐくひさりぶ川げんざるすじの御さつく
よふもつらくも。深さ山まこりりきる
あじいあもおそうしの光ふらをつくりし（柳木の身さし）
つくらぬめすまさ。けふをくもふづくさる紀（乱趣）
やまふどもをあどもいとゆかくまうまり川（柳木我の姿延）
らひ絡さ流のそことつしとあすくりのをあく
ろかそくおひてねそのへとさくじいあさ絡。
陰陽師あども、ゆかくハ女の男とのそうう（ちくふじのう定家さ本五）
あひ中又れバさうらりもやとあがをどさ（女の男をゆかせくし）

すがし津べざましく
盃まがし八月へ津べ本
しくハ細津べくしき
あとよろ印しおそろ
しきんく
ごくよの声よきこいと
けみそろしくて
花世緒物語ニ時平公三男
敦忠中納言らうまづう
ひろう時琵琶師紀を改
と伝りよ十二部のうち
倶毗羅大将と云を出て
わらんびをとられといふぞ
とゆみてそまく死あれ。
まく病の人よ云つくべう
於此よ八敦忠の兄八条
大将保忠のとうと小野
縁起よハみえくらり花可

らよ物のけ乃おくられいぐくらのまあさき
よ。ゆり用しとづつくひくうろそ海ぐをと
もしろいきゐふあるりとそりとこのひぢうも。
まけこうやうぬかまづ川べざましくて。
あらくうまやどろくもろく。陀羅尼よむを。
いぐおるふくやつとのあうさ男あやあろ
んぐつくよの声しうきは。いとけみそろ
しくて。つよくきあべくくそゆがゆれと
て。やとしまそく出るく。この病者とうしら
ひ給。ゆゑかくハうろとうら給たずうらやきそ
こううと。へぐおそくゆとさをよへハざゆ川
して。あびやうよこのひぢうと物語し

勤之を上臣之の事よ右将軍う縁りし草給てまへしとく言葉れ補しまひしよを
保忠つの乃ちなり。柏木を保忠公よそひよせてきるうと見ゆるあ
ゆとみひ息れど
盃致仕の年よりまゝと
我意くしきんある
しなり
ゆくのうろ物どもと
細さむう貴僧あらね
験者よハむひのあで
とともかきと此柏木
を大切よもひまふれよ
うく対面あくるよを
義なり
細 柏木の詞
れ出のまへ
しく父ゆくの為とこく
くふ何後よりれよの
まつり墨按比物のけお
らうくぐく念じまへと地と
との乃まハとあれとてまへ
しと
よう雨志くの 細 女三宮の
かまつべうれしつへしと
く墨按 おまよ女の身よの
とうしきひとぞれどもあり

給ゆとすびまくれど。すぐ後ろやざとう
とうつきそ。物まらとひし給ゆくくの。
うろりのびとともろひあそこのまとい川
らひそあ給しまさ海あゐとくりすく
うらあそつ。よりうまへるこし。海くと
まこのよおくけおしうつべくねんじた
まへるどご。海やうまうてくひ給も。いと
義ありうれ出のまへおよのつゝととゆかし
よりぬよらくるひかりそん女のすぬう
とそ。様よさうれ志うの男よそひする
なすかいとそしきとりもひさうへやむで

ゆくへのわのけのすけ給
ふ所をうかりとうか給
へるが柏木のうへ思し
とゝかるべし
むかしの世にもおすくやハ
ありけり
是業平二条后をさそ
ふうしなどせしをいふ

うへしるの身にもえくれ
河海ふかひてしまくまで
ふ我ハゆく身にもえ
らさりけり
この院のうちよおかげれお
ほしか八我ことしおハ身
よりうけねだ女三宮乃

とまくしそなめくかれ。さてもやれをな
さこゝろありて。さうおぼさあやまち
とひきりぞく。への御名をとまして。とも
うりきぬにひむりしの世にもおすくやハ
きれうと。きひるとすよ。行けむひとつ
ちしらうのれにうつり。うりとまくとそう（源の）
まなすりくそのすまゝへとも。ひとま（細 源の北殿とえ）
ばゆく見ゆりいげぬこともいかなりり
ひかくへしいふうさおやちらもなきまに（一服るうと）
おうせなすりし名アの頼うりやうくれ（細 試樂のけのこと 愚 源よ同又合）
きぶり。まだひそかにし事しねの。ゆくよ
もろくしてるうふしと。この院のさらよ（六条院女三宮のおもへ）

ようりあくがれありくらん玉むすびしまつくて 伊勢物語 おもひあまり出にし玉の
おつるんよ夜ふかく見えば玉むすびせよ 吉海云の玉むすびの寺 玉んことは
しくうれともえくねざもくー 葵巻よ源ス

けしからず
おほやけの院の内にあくがれ
ありきなどあるとうけく
ものなとくし

あくがれありかば。むすびとめ給へよ
どいとしもそげに。うしのやみに。あさ海し（探のりくのりし）
てすきかこゝひそうへひ給。こゝもの（小侍従も女三宮）
とのこそづくしう。うまもしうめがしう（の御ありさまをえきえ）
さ海をうりきそ。しらきめりやすわや（柏木のえ 女三宮みれわりさまをおひやりえ）
まづんにかの海の。めとうげよこなうちら
しくおやうれまぐいげよあうすく海
やゆきうふらんまゞ。いとくちさきらよ
もこうれバ。今さらにこの御くしよう（柏木の御え 細 表ろう御え）
けそもがくしご。この世のうへいなすく

なきのすせのはてしは
生まれても女三宮に念ふかき
やうにおもふ女三宮のわたくしこそ

こし養を　細 猫の事

孟 猫なりとみし夢は
懐妊の下にみえたり

こゝろぐるしうこそおぼゆれ　愚案 女三宮
いふぞかし
柏木の御心の程なり　彼柏木
の父より今はかぎりに成
まで柏木の方を御覧ずる
のがれぬ夢なりとも御

てをとぎぬるを。おぼろげの世の御ぐしにもあらず
とおぼすん。ひとへにおもひきこえぬる
ことを。あつくおもひしことにいひそでん
きん。こし養とおもひ給ひてもあはせ
てやみ侍りなましかば。心のうちにくたしての
くさおもひけるを。なかなかもらしきこえ
つるを院のきこしめされにしを。ものゝ
しう深くとも。我をさへすさまじきのみぞ。此人も
いひしにこそ　あらぬさへかくめしてわたらひの
てもわれいかにおもひかけぬ身をしらずとも
いさゝひて。いかにもみえきこえけるばかり
そのは。すゞろのこゝろもいとあはれ

んをいかでありありとまさりおほえて
女三宮も思ひわびて。いかでこのほどの人
やうにもかく柏をつかうまつらず世にそぐ
しきまゝなるべし。旧説草子地とは誤
あへんとおもふ　細 前の柏木の方に。網のかた
まちかひてく
　柏木の絶望の懐に女
三も立後て消やせん。柏
の絶ぬおもひの猶やあら
んとよそにても此は
消ぬおもひの柏の木にあら
じとの心也。光源氏
あるんとかくおもふ
よそにおぼえて。此と
おもふやうにもの柏と
さりにたり。懐かしきべ
ハおもひこそあらん也。
名つけられべきといふ
内裏の御合にまさりて空
也
〔illegible〕明星に註せられ禁忌
くたく
いかや此懐　細 此事なし

ざりしまへて。さしやせたるまじうれしと
とおもへどもかしうまいへとてんよとりく
かんとそうかいあるそ。おもひれにそて
こそ。此世のおもひいづくなりともいかで
しとうひすふ。いかにやとのしかりでうり
そうけられといふことさまうさうしく
なほはらしいやすましつみはんふ
云の世のつゞまこゝかやしてゐ
のたまひやうにかく

世のおぼえもいと給ひしを
あるのおもしろくやさしく[illegible]
夕べはさて
しも煙となりてんゆ
ふべの心ちなくて
くれぐれのし
細 引歌な[illegible]
細 此人は[illegible]ぬ人
[illegible]孟 師[illegible]ひるを
[illegible]も紙[illegible]
おもはんとおもひわれ
とも
今は[illegible]
人の[illegible]にて[illegible]
細 此[illegible]と
いろ[illegible]
女三と[illegible]世の縁
[illegible]及び[illegible]

河 蒼頡観鳥跡作文字 史記
孟 柏木今はの時女三宮への文のこと
[illegible]雲のそらともならぬとも
[illegible]夕べは[illegible]
てならはせ[illegible]
孟 [illegible]
ひとゝせも今いと[illegible]
の[illegible]
[illegible]
[illegible]のそら[illegible]
孟 [illegible]
[illegible]柏木の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]今[illegible]
[illegible]世の[illegible]
いろ[illegible]のちぎり[illegible]

[illegible]人とし
[illegible]給ふれば
おほやけ[illegible]
[illegible]
むかし[illegible]
例もむごり
孟 例は[illegible]期も[illegible]
の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
給ぬれど例はむげなるべし
孟 小侍従[illegible] 細 無期也
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]柏木の[illegible]
[illegible]
柏木の文之
[illegible]
[illegible]
細 柏木の[illegible]
[illegible]
孟 柏木之
[illegible]
孟 女三の[illegible]
産也
[illegible]

人りハなし花のにほひと
哢 源氏のさうなりきぐ
人のさひぐらんとそ
猶よ御かさぐらられ
なりく
そらしものなりよ
孟 河海ナリハ作学とあ
こ

きろとそのわらしさきとさなりをりしうろ
人ぐさうぐさうらく。おもしぐみもゆかしきんく
されバ。ゆかろうそこうらあつら。けふの
うちみは。おかなうちおしや。ゆりひきた
かりとおくてとおりもしくべ。おもむくし
くちをしうしよりとゆかさじ。人々へ
気色ありしくさじとゆかさはひんさるまど
めしさはらそいひしかくみぐらん
よきうられバ。御なりたのなうみせけんわう
うぐらうれまりて。うじまいりさうぐ。
衣ひと衣るやそあいさとおひく。りさ
しわぐうのぐよむかれきんみゆくこぞ

細 此庵の事也
源氏ゆも吉うなく
細 源の心也
柏木のなうなくて
師 人日とえ
実の銭子すうハなく
とうなよし給ひな也
細 葉を誕生也
ハ志なりハとくさん

みくらぐしき
細 男子ハ身をぐらうよ事
し給もららしかくぬ
方ありしと源の思ふんし
給く女ぎてぞあつひと
ろうよさ給ひぐうしそ
孟同
そこもあやしや
細 源の心ひづかあなく
我身の因果みて。おろ
ろうとく。此物語一切
むらひとなり
細 此世みくむくひとえ
この世そうくさひけぬ
れく後世ハまりよりし
とのりしそうく
孟 要集云有智之人以ニ

ところ給よ。うく志のびさうこしの。おや
みくよいらぐさうれつきつそぞうい
ですつんしそうしらべきれ。女こそかし
みとろくまされ。おやさこの人れさねめ
あれバ。やとくれとゆかさてよ。おさうくうて
ろぐうしさうさぐひなきりうらふく。ハ。
心やそれうこまりのし給もいとうらし。
まそもあやしや。わぐうしそよゆそろ
とさひしこのむしひあめりこのまま
てうくさひけぬうるよむそこりぬれぐ。
のちれ世のつきとそうしうるこうすんやと
せぐもを。ひとなるさそぬるしもれバ。ハうく

源のうなく
細 柏木ヨ給似うハなく
らαハイ
くうりのな
花かのうてとうなく
孟 冷泉院の御事なく
ムカリシニテリ此云
他人也

智恵力ハ能ク令ム地獄極重
之業ヲ現世ニ輕ク受ケ愚癡
之人ハ現世輕業ヲ獄ニ重シ

ごふやけんハ二日め首也
まことにおはしまする之

ひつさ[illegible]ハ二[illegible]
の[illegible]大人[illegible]

おしきハ抄[illegible]之[illegible]
いはまする[illegible]見ゆる
[illegible]

ちゐつのやしつきさころ
河 聽召次所おなしへ
源氏の院司と云

めしつぎ
まくこそめ云次
役人之

此清く何かうも[illegible]
て 孟 拾本の説よ依て
[illegible]ひと大きさ
[illegible] 忠棟 [illegible]
うの[illegible]ひのことハ大か
よの[illegible]ひハう[illegible]
へし

（細 宰の心をかね人のむすほゝれ之）
心しらるれどもくすゑよりぞおはし
ゝうおぼしいとゞあはれにひとゝな
ミつうまつれるふやの後武いう男[illegible]
う、世ざろくしれるくぞ、御てふかしいは
でしまふれうふやしるひよのつののお
（脇之）
しる御いかさ御、よろつさ五のこゝろぐん
もしくそろまんぐいどもしきえて川
（孟 枕ね之）（廿三日之）
るん、の日の夜ハ中宮のれうそこゝりち
のほまへのすみ、女房の中ふもちまぐよ
ゐおそろきはぐ世母やけごとよいか
（孟 宮の[illegible]之）（今の御つこはひト云りまう版）
めしうをさせまうり、れゝゆ、どんしさあ十
（六条院之）
が、あくのさやう、院のまつりぐ、ちやうせん

（孟 中宮職之）（細 中宮の大夫之）
めつざそころ、ゆよそのくゆすで、いうめ
しうをさせまつり、宮づかさまうらん
（細 冷泉院之）
じめて、院の御ぐし人られまいれり、七夜
（禁中之）
へうちよりそれをおほやけざ御たかり、
ちどの世どもすぐるくしとよつうまつる
あくさよ、世ばてすまごとも世母されぞく、
世母ざうのれよふしひのさぞきけり宮
よらし達部さしおやく[illegible]世母ゐさ
（孟 院之）
のそしらうとよおすきさすでうしづさ心
まくど、世らぐの御心のちらよ、こゝろぐる
しく世母をことありて、いつうをとりて
（細 御[illegible]ハ[illegible]）
らいしきこて給はず、れおそびなどは

よむりし給る
細 下心えおくとおもふべし
師 孟の哥のりごとえ入
給ハぬ也
とろふみもおかしけれど
孟 源の大将にもあつまで女
三の宮女のそらつく

孟 十三之
るかりくら。家ハさばかりひろ川ぢすら
浦海みくいてむし川けうおすらね 御産されて之 おほぞうしハ之
こゝのきそろしうかゞされゐろよ、流ゆる
どもこうしめさず、あるの心うちことを。柳木のこと
くろよつけても、かげしいれど、さりけれに 入 源氏之
のつみて、みえ、志ゐでやと、御門もかいく 死ぬまでわりと女三の宮かわとく
どハいとうら人めとうぶら御門をとじ又 人目よハ食ますにりそてあしまえく
むつしげよおきてすゐるどと、とりかさそて
もこなり給つきそゑどおれバ、のあん、志へ 女三の宮女の老くう之
なひとゐどハいぞやとろうふもかうし
ゆうすれ、見づつうさし出ゞ、給ひ、へ家清 ゆすまつ
お様のくびくらゆも志さまでよおかうしま 汝子のきもれい之

さのこしそ心かりつてうつ
おさうのきこえく源の
ぎろなよかりしますとふ
きわのみをなひく源乃
ふど家の色ろく桜尾よ
あそんのん付く

もそとしうゆくしうとさかれバ、ゆうとちゝよ 汝まうけめてうきもさりけ之 細 女のうき併く
そてすそて、さのことしそていかゞしてうつりこと 師 女三宮の心えく之
をきこしめと、いうめしうく、枝をつくく
て、おまふみも、なるずや、のいふつてねらよい 源の世三
なども、いすゝまいかげ、のどりしゝびゝ の御方よ御覆さうぬく
なつきなすぞうのぞさ給、世中の 細 源の詞
そらなすき枝をろまうくよも、末とどうう絶
心がそて、とゞるひぐら日がそで給れバ、
うろ絵のらうかうしきらへよろよう、孟 私之しきえく
えまうりこぬを、いらぐれにもいさはやう
よかげ、がみうらやしかぐうそうてそて
流木根のそぐうかげさしのぞきさまへう、活 孟 女三之

くらう人ハつゐにもゆるしなかり
孟 産して死ぬれバ罪
ふかきとなり

つミのほけつひよりハ
女三ハつミハなきよし紀
と物のまよひなりハなきなり
ゐべし 花 実ハ果のい
きせまつらもとかるべ
し

ぐしそげ給ひて。なほえいきたるまじ
細 文の心也
き心ちなんし侍るを。かゝる人ハつミもおも
抄 出家の功徳によりいきやせんとなり
かなり。あまになりて。もしそれにやいき
とまるとこゝろミ。又なくなるともつミをう
しなふこともやとなん思ひ侍ると。つねの
ほけよりハいとおとなびてきこえ
たしかなる也
給ふを。いとうたてゆゝしき御事なり。
細 源の詞
などてかさまでハおぼさるゝ。かゝるこ
えいきもあるまじきといふをおぼしめすまじきとなり
とハさのみこそおそろしかなれど。さてながら
抄 産のこと 産して必死ともなし
へぬわざならばこそあらめと
ミなおそるれどもいきのびる也
きこえ給ふ。御心のうちにハ。まことにさ
細 源の心中也 尼にならんと思召さバさせ奉らんと也
もおぼしよりての給はゞ。さやうにてミたてまつらん

心おかれ給はん
細 女三の源に心おかれ
給はんとなり 抄 源の方
よりハ何ごとに心をおか
れんとなり
えおもひなほすまじう
女三をおしにくき
なからバあらためで
おもひなほすまじき
ゆへにそのうき事 諒闇
ありぬべきとなり
ことに人の見もいと
おしく 朱雀院なども
下心ハあしくおぼさねバ
源の解怠とおぼさん
なれバとて尼になし
たてまつらん
と思召なり
女三のおくての末を
さ法髪をそぎ捨ても
心苦しきとなり

ハ哀なりなんかし。かつミつゝも。ことに
孟 うくもつらくもおもふべきをたゞ嘆きて思ひなほさじとなり
ふれて心おかれ給はんが心ぐるしう。我
ながらもえおもひなほすまじう。うき
こともうちまじりぬべきを。おのづから
おろかに人のミとがむることもあらんが。
いといとほしう。院などのきこしめさん
朱雀院之
こともわがおこたりにのミこそハなら
め。御なやミにことつけて。さもや
なしたてまつりてましとおぼしよれど。又
いとあたらしう。哀にかばかりとをき
ミぐしのおひさきを。しかやつさんこ
細 源の詞之
とも心ぐるしければ。猶つよくおぼしな

まゝけふハ此方せしらうどりとゆめら人も
なひしうるうもあしらうろれだんざすりに
しみのこあるせよなんむすしゆえしあそて御ゆ
糸り給ひといふうわるとやさそでわさ
まうちれげゆく、折ふしあつうは夜
物ほどさらいつくしげなれん。いちじるきわ
やまうあらうとも心をくゆるしつべき
にさ侍られども、まり給ふ山のこうひハ乳づ
らきにとしこひゆうわらとこそしめ
して、衰に床ふゆ物をよふくむや
を給ひしのこあれバ、いつよりのしまべきさは
うとにをとこるひともえずれて物がしまり。

されバとてまづしまり
しうとよりも
女三宮の六条院へかへり
てより後は朱雀院を
見まつらせあらねを
此のわどよりも、この
産後のほど物ゆへ抄朱
雀院を恋しくとえ
みもえずしもそまり
くほ物とりゆくハ
みも朱雀をと見なう
ぬ所よみぬわうやわ
らんとて女三の宮さる
よそとく
く哭すふさ
あらに女三宮の朱雀
と恋しくゆかしの事
かほをへ―て源氏よ
ア朱雀院へ申されし

さればよそりのつう人の物をとらし
めきて見し人々へだんいとよりしげるく
おりゆて、年比となくぞりし程よ
つきも院のいと恋しく覚て給をかき
をこなまうれなりめらやといへう
るさ給らく嘆し給ふ夜、さるべきさへし
てつく人参をさせ給ふれど、いとしへう
ようられしともかしてあまり恋しく
はものめしをかでらせよらくれておさせ
給ひてさうはそうぞもすて儀よ
くさうりおそしまいられバ、おもはし院
ゆかるさらしこまり嘆し給ひ世中さる

まだひきあげざる物ハ
このたびのやうに
人のおやの心ハやみにハ
あらねども
まよはれさきだつ所のみぞ
つぎのまゝにありて
孟子注老少不定の
義ハ墨抜子のなくれ
親のさきだつ例ハ所経
の没するまでまで女
三のさきだつありく朱
雀も女三も妄執の輪廻
あるべしとぞ
うらやましく見まゐらせ給
源氏も道世の時ならば
ひかれバ朱雀の院の御事
なるべきやうのかくし

尽きすまじうも侍しかど、なほおもほえ
さためがたき物ハ、このたびのやうになん
見えれど、そこらひもけさいしてすり
おほれさきだつ例のつぎのまゝにある
でもられなバやがてこの恨りやうこそよ
おもんとわがさきするよ此世のそしり給
ハもしそうくりのしるとて給はれうさ
らとなてある御めしうするうつしさ海
まづら出ひやつれまそうつしさけわう
かくすんもぞめれ給もこさわし海
わりうことやしるもうしやましくそ
まり給ちいの御川海此し給えるひ

給ふ海ことなりけるやそみも御しの
など月比よりも給へる御ありさまよろしく
思ひわるども系しぬつりきやうくを
のし給よてそるごとこそ給りさいさ
きおもしかれども給ハかのまへま給
おとゝ系りていれなりし給ふやをとを
とうりへつくろひやりて、ゆかしきも
まかりし給はずりけいまことをしやゝを
かくよるのうちのそのうるなどのことち
きれとまさげんつくだりのそこるひ
みもめつねがうさいつゝきまれどよめ
ゆかしつゝ覚て給らんさ海とさあなが

ゆかしの[illegible]
ことてらじんとて、この
ゆうさかきのまことにまかるの
ごくこの御心にまかりなるとく

ことゆかしつゝ此おかし給
りんさ御をさるがうし見給
ひきこゆなり
女三のゆかしつゝなくおほひ
ひし我後をと見るゝと院

のゝ給ふ御詞なり

行末とをき 細 行末ま

ことにかへりてこと

て人のそしりもあるべし

とく 愚 出家ハこゝろとゝ

るまじく若くて末之

けがれハかへりてことご

とそしらるゝやうなど

もこゝのゝふ 女三の宮

こそ出家のあることのたまふ

とし

このつゐでにとて。あまになさせ給ひてよと

給ふ。さる御ほいあらばいとたうとき

くべうも覚え侍らぬを。かくおはします

たるつゐでに。あまになさせ給ひてよと

きこえ給ふ。さる御ほいあらばいとたうとき

ことなるを。さすがにかぎらぬ命のほどは

て。行すゑとをき人は。かへりてことのみだれ

あり。世の人にそしらるゝやうありぬべき

などのたまはせて。大殿の君にかくなんすゝめ

の給つるを。今はかぎりのさまならば

の給ふを。いまは限のさまならば。片時の

ほどにてもそのたすけあるべきさまにてと

さけとは人の心をみだる

孟 邪気の所為にてもあれ

かくて同心不可と

細 院の

物のけのをしへにても

此詞とも物のけの所為

るとも、かうゐことに

てもあらばこそと

ゆるさゞりしは院の

朱雀の御事にこの事は

ハ女三よ源氏のこゝろ

あらぬとなり

となん思ふ給ふるとのたまへば。日比もかくなん

のたまへど。ざけなどの人の心たぶろかして

かゝる方にてすゝむるやうも侍なるをとて

きゝも入侍らぬなりときこえ給。

物のけのをしへにても。それにまけぬとて

あしかるべきことならばこそはゞからめ。

よわりにたる人の。限とて物し給はんこ

とききすぐさんは。後の悔心ぐるしうや

の給。心のうちには。かぎりなくうし

ろやすくゆづりをきしことをうけとり

給ひて。さしも心ざしふかゝらず。わが思ふや

うにはあらぬ御気色を。きこしめしおかれて。

流源ハ
まかせて
はまゆうて之

ちよりてのちは宮く
たいりまで根をかくさず
ちひでちらちよのこ口か
しうおゆしもくろなみ之
うちおりよりてなされ
此次第に女三のお家へて
源によそへられたりんち
御許かんと也
せを根よる寺色あらう
くし　細　今お家おわたへいこ
とそれくるくに御たる七
しくおけのつみの時お
家をさしうひて八源へ
迷惑めりん而か宮お向
なるよと時代とお
かしめさしん
うとおはしまさん
其此の中ちの大かさの
頼みにハ女三お家の後まを
とくの事なれんと也
とおもひけ玉ひけり
おたとのうちそれにその
りたと源よおもひける
よおかしみくとも

としごろ思ひしけり川めぐりごと。
源を朱雀の文
御まよひくちにかしことにも
女三の源に露思せねはそれを世の人もしらぬを云也之
らねど人の人のおもひしらん所も、あり
うちかりそめてもなむ世の聞えもおもしろ
大将の事之
なんもえよりハ人さりとて世とうしろを
白　人ひとりふたりをのくら
源之
うちそれとなうぞ、あさましうなんおも
このうしろぞゆるしてまかれめくざき
ればこそなをとうくおりけ玉ひけりし
たうしにハあるもてかくげなをすくさ
朱雀の事思ひやり也之
海にハまかすとも、それそうなんによるく
細　三条宮の後に八女三の事
給ふりとろくろ給ひりまつるを、うつくしう
てすゑをなかもんとらがかりしまずよふ。
朱雀の事を世まで

みくげにそむくる也にハ
ちく六条院とおもやうゆうん
おりくた朱雀院女三ちりの
ひとの御しもさいふとを
ひとよりまへもも
孟　源も出家のまゝ思ひ給ふ
こゝろさくり思　女三の
御出家して三条宮にまいへ
あまらふもあくけれは
わけるにおもひすれ
ハらもえたちみ
じさまに
よ　女三の御出家の時分
さへてひたすら御そ
らいへらし朱雀も出家の
みそみて
いむしうけおかんとに
細　戒をうけ給ふと也そ
法縁にもこくて
御女三宮のかたいりさ
そちくも戒をさふ
けて法縁にせしめまへ
らせんとて

あらめに源氏を根と思くやうにみかぐて、お家をさせて御わたり
なく所分の宮に給せてつせんとえ、朱雀の御ために所にて給
ふたり女三ちりのふたり
さらひ女三のお家のちさみそえ
さりとさてもうちろめきうしくて
とさて又その中しもさいふとをいとと
ろうよいらちもひかすら給ひじその
源の出家の事とも大事人とも
うつろへともまえてんなど、御ゆ
朱雀院の御之
とりてさらへりくそのしきうつるぐ
まいむりしうけ給らんとぞ、御縁よ
世の事とちをそれを
ちんうしとの給ひてかとしの君うし
ともをされて
とおぼすらもおもそれてこはいかう分
べきこともそとりてしくにおもひしれ
孟　中への内に入りひて女三への御之
女三の
えうへ給へそ、さうよりてなかどうう

いく世しも侍るまじき
孟 いく世しもあらぬ我
身をなぞもかく
しー

古今集の哥也

いとあるまじき御事とも
思ひしに御身より
御いとまありてかくなん
御後とをまかりて
書様あれとも

これはてうし也と
孟 女三の宮ハこれはかた
やう〳〵さらに源をう
らみたまへるにと也

暁月

いく世しも侍るまじき身をふりすてて
かうハ思しなりにけるぞと猶おぼしかへせ
げにあつしくて御湯まゐりなどだにも
しめやかにきこえさせ給ひしも御身よ
りてこそとおぼしめしにやうはへ
つらひおきてこそと思ひ給へしか
御かへりことの御つゝしみ
これなくて 御とゝのへは
御かたにもいとこよなくもあは
れなるによりてこそ
哀なる御ありさまを
うち泣けるも
らうたげに

そうをすてたまはんにをよばぬ
かな御らんじてもうし
ゆくほどのかたさを給ひて
きはめてあはれなることをきこゆ
しらぬさまにおぼしたり
じやうのなかにハえおぼしかたく
なほ御くちをしき御ことにて
んとしたまへるをかきくれて
んじあひ給ふこのよにハ
むかしのこともわすれ給ひ
わすれてしもあらぬ
しうねくもつらくめしたまへ

源の仰也
孟 源
女三の御出家之
朱雀之
尼よりも後世ハのこり之
朱雀の女三ハの出家之
出家までもせめて
安まかりませと之

源のこりより
秘なる朱雀ハ別して女三宮
の事よりておかしまして世ハ
ちかくなかれさせたまへはてハ
人はともかくもやすらかにと
かくて源を頼み
きこし

人目残をもられぬ
細源のりこゝろから
申礼をえ及へまいらせ
ぬとも

えどきまて呪らそぬよいそ正さとめぬ
おやかるとよつり。こゝしいろやうりかしのそ。
おちくおうりえをむすらし。[朱雀の御遺言ぞ御ゐもくあの方の事もわ]御心ちとも
うと給つぞ。中らしも。姿のやうよおぼへを
ぶらしんゆけしひよらう背出がしいろと
ゆきのりしとまりとをとらんはられぬ
らうりがつさは。こしさうしよ年りから
なじ心ぐし給ふ。遂ふよ人ぐ年しを給世の
申れ分よしわそうよ出わしく給しまよ又
とおりいつぐてしでよらんしの衰よさ
とまがうらかわし侍しうは。おがいまとわ
らぶりけめどもくらやめしつけそしとし候へ

さ海こゝよりつりく
細尾よ幽路く出院よ
彼のみへさこしもいぐ
ならし文今さしる山里子
とよ彼子よべきさ子もわ
らぞとしく
さ海りまてさぐひく
女三の体わら海の表無
よ御らべくをろしひ路
へとのらく松覚へらし朱
雀の下らわの作せの御之
とにつもそ出合せて
あらうん又りてをろうり
ちしめ朱雀の女三と源に
よのるまひしりひるく
尾よりみりひそのとにさ
まるるさらひて出がし
ちろうれしくと合文よ
朱雀よ御れば源のさま
まふきるひるまさやらう
るとそえをろりしとのまえ
とぶりんら 源の其何と
なく女三の体名あよ忘却
してと弁やあく女三のひつ

うろやまくゝまつきとりしもいきこる内
つま給しべき海こしよりりて人も出げき
すまめるもつきたりりべきとよさるへさ山
里などよりけるれさしんま様とも又
きまりよ心内そうへらやさ海よ先さ
ぐひく花出がりをひまりしかんと
をえ多へべくさとよりくまそで出かきく
あらうんくりてをらうなきへらる
ぐりらくもくろかれ給て仰ず女三の御家朱雀も
えわさまへ給しそとてけぬいとまんぐ
さがふ覚しり嫁殿の体らよ御物
のけ出来くらうぞわつよいとくしつと

うすと未詳ハ御名れハ未
詳の比ハ好るれべし

いまハかへりなんとてうち
わらふ　河　紫の上ハ小康
孫の女者　頭光士乃邪氣
にて法堂の流むき可我
久しく物ひりひて病に
ほかしめさせ給へを猶
邪氣人ハつきて今と
そられしなれとそまと
殆て数ひかりて
よりけるとぞ

かへしつと、ひとりをばおぼしたりし
かいとねたかりしかば、このわたりにさり
げなくてなん日比さぶらひつる。いまハかへ
りなんとてうちわらふ。いとあさましう
さハ、このものゝけのこゝにもはなれざ
りけるにやあらんとおぼすに、いとおしうくや
しうおぼさる。宮すこしいき出給ふやうなれど、な
ほたのみがたげに見え給。さぶらふ人〳〵も
いといふかひなうおぼゆれど、かうても
たひらかにだにおはしまさばとねんじ
つゝ御ずほふ又のべて、たゆみなくおこな
はせなど、よろづにせさせ給。ゑもんのかみハ

のことよとゝくしらく
細　柏木一条の宮へ今一度
まうづべきとし之

らいまうでてとやまと前
女二宮を柏木に御息所の
ゆるし生一条の御息所ハ
娘をおやと役仕の大臣乃
思ふやうにて御ひく朱

かゝる御事を聞給に、いとゞきえいり
やうにし給て、むげにたのむかたすくなうな
りたまひにたり。女宮の哀に覚えさ
せ給へば、こゝにわたり給はんことハ今さら
にかる〴〵しきやうにもあらんを、うへもおと
ゞもかくつとそひおはすれば、をのづから
とりはづして見奉り給ふやうもあらんに
あぢきなしとおぼして、かの宮にとかく
していまひとたびまうでんとの給を、さらに
ゆるしきこえ給はず。誰にもこの宮の御こと
をきこえつけ給。はじめより母宮す所は
をさ〳〵心ゆき給はざりしを

萑も出月ふくらしとぞく
二条の家　細　女三宮の御す
御んよもゐるつきのや
されたまく出さめ給
ふく　師　源の女三宮さ
のさ時めくしかたぬを楽
萑の歌をさるつねそに
女二宮ハ柏木のまめやか
なことのまゝるしとぞ

こゝ霞中ハ柏と乳母云
まつりて柏せさせ母上へ
みなと　細　柏木以前の事也
を母上へもいひし

そてあそゆくし
細　柏木よそられおゆるぐ
きみかくもあしとぞ
按大納言の君　細　後なり
紅梅の御ことなるを
師　柏木の弟なり

（御位給仕の恩之）（こよひぞ之）（未詳）
このゆふぐれのおもうちわぶるにやまざりし給
てんのしつくつきらはまだけおぼえ院中を
（孟　女三宮の名業）
いづくとなんとさがしゆかしけるゝと二条の宮
（下に二条　給）
の御むしとゞめしかにぞれたりつゝおほそよ
（孟　女三の事と柏木の内衣之）
中くらのいひにうちたちやもとくまる
（柏木のこと）
やうろうとりもろてまうけさせくりとの
（いはぎの之）（細　柏木の心之）
給ひすこと安給しとどうじけるとおもひを
（柏木の命短くて女二と末ながらあるとの心之）
くてうちとそゐなりかゝるおほりと見よ
（細　不堪惑之何みかう之）
つけくはさ海ぐよいておしまれどもかり
（女三の比と柏木の家）
おかり命あれバよくぬちがさうらいあ
じやくうくしるけれまんがくなりしき
そどはくがしわりてともろうし御をきせ

（孟　柏の母の御ゆく）（四君之）
まへにあらん人ゆもうちて給いでおはゆく
しどられなりていつくしく世よかぐさに
身にそうかぞ时さ紀のこしとどバけうこ
（柏の母の御歌）
まかしとそ御きよのよかくさまくへばえ心ざし
（きゆへあるくも女二の事とやまなる之）
やりて給ハどもたゞ大弁のおもひぞあるとせよ
（柏木のこと）
ことだにハらはさうゆるてつけ給らんずるくは
（孟　柏木の弟之）
どうよしくおかりつらいあすればおとうと
の君だちもまだおもひのこうさはおやと
（給仕大臣の）
のこうのことをことまゐるよかりなれば
（家内の事之）
うの給そぬれしともとぬく人なく殿乃
（夢中のなる之）
うちのひともあけぐやけも
まうらかけるを給くこうらとこて

よろこびにおりひありし
て今一しほまうり
今上の御心に柏木昇進
の給ひに病気をとり
あそびんを惜しみて参
内もありしとされ
先そまうしもあまたく

細かく
やよくありし
権大納言に推任あれど
あまりおかくえせ出べきによ
くわうしくしく
御よろこびにも 細 昇進
を聞せしめ給ひ 仰権
大納言になり給ふ
こびに夕霧見おかせる
なり

しめして。猶に権大納言になさせたまふ（柏木の病気をやめかさせんためなりとぞ）
よろこびにおもひおこして。今一たびもまゐり給（よろこび）
ふやと。おぼしのたまはせけれど。（柏木の病気重くして猶かへるもえまゐりがたし）
さらにえためらひやり給はで。くるし（父大臣）
きなかにも。かしこまり申給ふ。大殿も
かくおもきおぼえをみ給ふにつけても。い
よゝかなしうあたらしと思しまどふ。
大将の君。つねにいとふかうおもひなげき（夕霧）
とぶらひきこえ給ふ。御よろこびにも。まづ（よろこび）（柏木の病にておなじ對へ）
まうでたまへり。このおはするたいのほとり。こ（此内門也 但大納言と病気とに群集し）
なたのみかどは。馬車たちこみ。人さはがし
うさはぎみちたり。ことしとなりては。おき（柏木の）

ども。くるしき御病に
みだれながらえ對面し
給はで
柏木の平臥の御まくらへ
え對面せず。おぼつかなく
おもひて。かひなき故
給ふにえあらで。是非す
とおもふに。口をしければ
親にもましてみながら
ら對面し給ふべく 抄 義
河業平御給ふ 栗田殿は
病中に関白に成給ふは
よろこびは小野宮殿ま
いりたまはざりしやのこ
とおもひて。しのび入り
まうでなさしめ對面あ
りてよかりけるにとあ
しう仰せられたまへり
おもひけるて待つ云々

あがる事もをさをさし給はねば。おも（柏 夕霧のおもむき）
おもゝしき御さまに。みだれながらえ對面（柏木の心）
し給はで。おもひつゝ。よわりぬること（柏木の心）
と思ふに。くちをしければ。なほこなたに（柏木の夕霧への詞）
いらせ給へ。いとらうがはしきさまに侍る
つみは。おのづからおぼしゆるされなんとて。ふ
しけるまくらがみのかたに。そうなど（加持の僧を暫時外へ出して）
しばし出し給ひて。いれたてまつり給ふ（細 紹介なり）
はやうより。いさゝかへだて給ふこと（夕霧と）
なう。むつびかはし給ふ御なかなれば。（夕霧の心）
わかれんことの。かなしう。こひしかるべき
なげき。おやはらからの御おもひにもお（細 夕霧の心の中）
とらず。けふは悦びとて。こゝちよげなら

ゑかうれしうかひよ
抄 住寂のまろびまかんち
をとまろんと夕霧の思
ひふきもるすきまし

ましとおもひまいて口おしうこそひとりぞかし　一に名文書付
くしのすけげすくハ絡よせかうなみたう
めうはしまろはひよハうさらくしまゐらせとを
やしもそおぼつれしそ木丁のつま絡ひき
あげのつれバいびと口わしうそのへ人ゐもあり　細 御本の相
ぞなりおそく作りやしそお湯うしつり　むかしのこゝろおもきことあるみえ　御本の称之
どしいれくすそうしおさきあいしんらしまへ
どいとくらうしげすうら思ろそくてねびとの　つねりのかうかうぬりへ之
なかつうらるかうちかとおかそうきて
かそゆひきうけてみるまつらおかまへ乃　抄 庵中にも有
あくうりのきうげハげしひとうだら　え葛抄之
うふかくそぞけすなしもそくるさうらと　一 極へゆふもち らとし之

やせ給ひつゝりひとつ
孟饒（サウホセ） 荘子 中にみへたり
らうそくし

ひとしほづゝひまな
細 夕霧の相 仰 御本のを
人のかくおぼしてぞなり
やとえるむすびまゐる
てのまゝ御あ

あまりし目そとありしく西とうとくまげ
らひさるんハ君のつくしきひげをとぞ
きいりのむつかしさけきひをそふわざる
分をやをきこしげひさうしもいふかくえろ
うわてきちかうそうしてまかしをそば　気色したてまつる
どそくりのみぞおとこを絡けるひでよ
をげれハいきもしらろつてあそれげすり
ひくしうらづつひ給経らうへ゛るよいて
うとそそとるそれ絡ハざりそりつねのれ
きろうちろも中くまきうてすんらし
絡とのゝ御挽しう。洞ふしのびひてとられ　又夕霧の相
よ御ぞろ湯るすくとしそちらひりゆめしげ。　欠けかまのうへ へ不そ

くるしみをなげく
うらみハ朋友の中までも
此禍ハ煩悩ハ何ぞより
ひとりしらずふ迷を
けがらしみだりつかまつる
ようしく

いのち親子のちぎりもなや
行儀も乱れるにつれて命ハ
うれしくもされどもそ
もせうさし身のうへわる
もらしそれば福の心と死
期をおくらもそうと
なり

いづくもわうれ此れんろのこ海と何
ごしみてとまら給るぐるまえらくこ紀
待くれくちくしき親るなぐしゆがつるる
くのこるすくのあまくつみにとりくおそ
けがわともがし待くれそこぞくうしき
こともおけ無ごてちまちよくつまて
せんずらし明らは月日またてよらり侍
まされど今いら川しらうろもらをとる
やすまるん世しけるさ身をさ海くうり
ひさことめくるいのち親るるのちく
あや。さみすぎつよし世へくるし
う侍まへらくろすそるん。いそぐしゆんら

細 禁木の句
細 点
孟 欲心
孟 不忍

よろしく此世のうちられ
細 三なりしく口惜ることまま
へらひのべしきるし
おやるもつてゐやらうかさうてが
さらりがるこま人の一句之
あんよつくかまつることを
細 河海の流いらば其いきぎ
なりぞの親しきてらせ候之
身をくらりえろうさ
嗟孟曰
おさハ世間立身のゑする
へし此立後の云やう面白
し。孝經云夫孝ハ始於事
親中於事君終於立身此
んとのづくしぞくらう
愚按身をくらりえろとらふ
細八論語曰曾子曰吾日三
省吾身爲人謀而不忠
乎與朋友交而不信乎
傳不習乎せんして我
立身のつとめのいそくぬ
のらしきとつかや

のま何らきらは此の世乃もりもらがら紀
こゝはいてもおもらんおやみとつくり
まわりさして今さらくまはんじともろや
おし。あちはつかつらいしもなうぞの孫
みく身をくらりえろうさ。おまつてん
うぞくおりしめぐらきをそぐめ川る。よ
くらのるげきちなぞさうりのこそまろ心
のくらよ。おしまへそうてくのの給とら
かるいまはのさぐさみくおまくへまん
べきことぞひ給れとし親無びがさごとを。
非はまへられ給んこれう色わまなて
りのもれぐ。さ海ぐなろすてみくさら此

父母よりさきだちてまの事
の心のやみにまよわせ親又父親りょうること
此世の行念ハ身分しくく
今生へこえまつの上さしてるさ一子の言之
此世の父子の不言子云之
欲をへそらる事をとさ
孟女三密通の事之
今人の利よりくはなしらとへ云之
孟夕方にそらりも云之
ひがきさま細そとさ
細 兄弟人兄弟色み云く

四十四

うちゑめ給しんとあ[illegible]。六条院に
いさゝかなる事のたがひめありて。月ごろ
心のうちにかしこまり申す事侍しを。
いとほいなう世中心ぼそうおもひなりて。
やまひづきぬとおぼえ侍しに。めしありて
院の御賀の楽所のこゝろみの日まゐりて。
御けしきを給はりしに。猶ゆるされぬ御心
ばへあるさまに。御めじりを見たてまつり侍り
て。いとゞ世にながらへん事もはゞかり
おほう覚なり侍りて。あぢきなう思ふ給へ
しに。心のさはぎそめて。かくしづまらず
なりぬるになん。ひとかずにはおぼし

孟 女三のこと
柏木の心中に源を恐る事あるよしなり
細 源をおそれ給ひて
楽所の試 孟 院の賀の試楽也
人数よい 細 宮方を源ハ人数とハゆかぬとまうで

いれざりけめど。いはけなう侍しときより
ふかくたのみ申す心の侍しを。いかなるざ
うげんなどのありけるにかと。これなんこ
の世のうれへにてのこり侍るべければ。ろ
んなうかの後の世のさまたげにもやと思ふ
給ふるを。ことのついで侍らば。御みゝとゞ
めて。よろしうあきらめ申させ給へ。
なからんうしろにも。此かうじゆるされ
たらんなん。御徳に侍るべきなどの給
まゝに。いとくるしげのみまされば。
いみじうて心のうちに思ひあはする事
どもあれど。さしてたしかにはえしも

細 此一事今生の妄執なり 論なく
孟 勘事也
徳也 孟
夕霧の心

我ハ幼少より源を頼みまいらせしに
かく源の御かうじをかうぶりぬる
夕霧の[illegible]
柏木の[illegible]女三の宮

とハ思ひ合をみるへし
又ハ親の付そへし也

なとくゆかりとなれりし
てハ孟子のすゝめ
よくしらバ何とくとく
うけのかうしぬるしく
しりんへき歟むしく
抄 源氏の一こまろれ病
のもとりしろと柏の時
まふゆへよみ夕顔の別し
て故梅よそふ之

なふあそもしまゐや八
つねよおもとハるにて
ゆめうくしいふんしもり
よつりさらよみあす
のかけりの花めんさしとし

そふらしく、いかなる人の娘よりハいさゝしく（細 夕顔の父）（源氏）
よさやうかうけん乱もみすくさとくり（又ハ柏木とゆうさぬ人きもえそさし）
まつるりとも笑がゝろさむげさ給さし（抄 柏木老恵の称と源も思さるへし）
うぐりうつしそ、くらおしかうや給めり
しら、なとうく地ガすくしあゝめくハ今
まくへやそのこいすむひつかん、ふすくうるさ（抄 夫をやしへ）
わさしゝめ申へりさう抱と、今ハらふまりひ（さ物そとし）
すゝやそて、もり人さ歯がしくかすく（夕顔の心中之）
抄 消ゆらけまいさうを源おわりつうおり（細 柏木の父）
よ此のしうけさ面くるべうしそ作りうれ
されどいとうくらへあもとしりやつと
えうしみうしうめ命の御をとせひ

抄 ときぞへのかたよ思ひて
夕顔よ付けらくさり
こしもたらるのしとく
此見をさらんまへてそうへ
るのつかとあらバ此見を
とらへて源へ申あまう
めまへとそことやとけ
他人よハロおかしいかるとき
心かし、まねしそ源氏も
藤原氏のかのさやかめ
して文帝時も心かし
きまて申白されたかれ
あうんと云ふ夕顔の思忠
とらんてつひまてしく
ことよあれしいへうしいきとる
よ頭中ても藤氏之一尺
やしひめへとし

のぞ見給ふるもとりくるとんどのと（左つうかひん之）
とハさしれれ心よりのうしまつ申すさ
あべきさつかで給ふんありてハ此見をさ（細 藤原之）
くらへうくとそて此のしとうすん。一条よ
抱し給ふ、ことよかれくとうひ此のし（夕顔に此人ハおつてさうれとも）
見心ぐうしきさ歯して流るどふを（抄 朱雀院の御とし）
えうしめされ給うんとつゝろひうくへうと
の給いて歯がしきてしハ此母うくへあれど、
心らとんてさすへかりよ見えれハ出すせる（くやくうまし）
ひよし、まうさ此のし給、うどまつ侍とも（抄 柏の北の方いそで）
からき系うら人地がなどおつしあつまり（母上又人后之）
て、人でも立さはげハすく出のひ也。（抄 夕顔の父うつさん）

女御とは　孟　冷泉院の女御也。弘徽殿柏木のいもうと也

やむごとなき　細　扁鵲とて　もろこし何の益もありし人のことく稀にもいふ人にこそ有けれ。扁鵲もれおはしけれ。まやむ薬なし師孟の扁鵲もなき也。あはのきえいるやうに　泡のあはれきえてうさ身しきうきのがれて何ともよのはかなく　法華経　世皆不牢固如水沫泡焔

女御をばさらにもきこえず此大将の御かたなどもいといみじうなげき給ふ心おきてのあまねく人のこのかみ心に物し給ひければ右の大殿の北の方もこの君をのみぞむつましき物におもひきこえ給ひければよろづにおぼしなげきて御いのりなどとりわきてせさせ給へれどやむくすりならねばかひなきわざになん有ける女宮にもつゐにえ対面しきこえ給はであはのきえいるやうにてうせ給ひぬ年比したの心こそねんごろにふかくもなかりしか大かたにはいとあらまほしくもてなしかしづき

けむつかしう　孟　気色を所からうつくしきさま　くつろぎもとも　柏木の令をなげく也　女二の宮の御ことなりともひかれて　孟　女二の人からよくあり　御息所のみな柏木の事をなげき給ふ心也　武衛の御子に清慎公の孫女を准して兵部卿の女ども

きこえてけはひなつかしう心ばへをかしううちとけぬさまにてすぐし給ひければつらきふしもことになしたゞかくみじかかりける御身にてあやしくなべての世すさまじくおもひ給へけるなりけりとおもひいで給ふに心ぼそうてうちながめがちにておはします御息所もいみじう人わらへにくちをしと見たてまつりなげき給ふ事かぎりなし大殿北の方などはましていはん方なく我こそさきだためよのことはりなうつらいことゝこがれ給へどなにのかひなしあま宮はおほけなき心もうたて

ふ八弁かねたる大弁をば
しらせたまふ人
御心のまゝにもとゝも
ひとへしもなきなかなり
御蔵人を柏木のゆかりしく
なひらるへし　忌接也
葉下柏木の逸抄夜猫
と覚えられるといふ物語
し合もなるよも結ふん
と女三の宮をれしきなり
此あはれのまゝと柏木の
わかそとしてひてさひさ
かしこまりをもなみそえ

いかにはと　五十日のも　昔
祝ひなるしとに

細　嬰児乃
物語なし
かなしとなしもなる

てのこりなくされらく。世よなかれそとさもに
ぞきこえさせたまふ。と給ひけれど
いとゝ哀なりし。わか君のけはひしとさて
ともひらうしも。げなりつきなく
や。たゝいのかはよくさくもきこえ
しまふさ夜ぐ桃心得そらそら
なかれのぬ。やんごとなきれば。雲の気色も
桃ともくふくこの宮いの御心に
つまめて。いとゝあはれなり給ひ
いかよりけて物語なくして給。物に
まさしけれ。いさそやかは御
ろかやいてやいとひとくもかなし。

例のけはひさ夜しそてくるの御しなまへ
しりばいよされしらの給ふて。
其しまてもつらくて。夜くさそて
御給。日くおもひつくして。いよしさや
ことにく。限なきよりそれてとき
れいよりもねまつるを給わんともて
てまつくりとなきなり
ことさら夜を人でいりよみる
やさしへど。流さこしせそて。
しかりこえ。物がしなし。いりの
ちくもあはれそて。なきそたちは
さしれ物おもひてそひて。御
れめのといさまやうよさりそてこの御
のの御けはひさ夜
かさまも結ばたれども
うれしかなさきりのを
とくし　女三の宮尼よる
まことはれども

なかの女よ
まばゆ御親の御座なも
尼の姿かはしなる
さとありり
男子なる

いとくちをしうまべゆゝさ
細 河海よ両説尤よ可然
河 弟君ハ太政大臣の子
あたよ〳〵りにりてみまさ
るへとすがゆさとよへる
説一説ニ いまこむ君なぬ
自のちらるにゝ〳〵うの
説義かるを真如の文あん
ぐるしくとある説 普賢明
星よ八段の説を用て天文
二年九月十日仍所如此治
定也なく孟津よ八荒の説
あり一説のゝハいりかが
なる説なく師説も宜ゝ
まかぬをとの義也
しるハこゝよけらぬも
西宮にてそよのつゝと尼
びをひとハ〳〵れ源よ秘
て背きさまゝつうとなん
私 猶もさまでゝらぬくら

のわたくしよつらしと思ひたり。宮の御さまの
だんどもとうちみもえみて。けしきのいとを
なよよしあるにこそ。うれしとかほよりて
ありさまもあてはかなり。むかしのやまざと
もすさとうしろゝろくしうまはゆゐさ
わざとのやうしもある家も。かゝるあて流ぐ
しのまへの水をもひろゝりしたるをいとくう
しく〳〵ゆしてひさしふかゝりそてつけゝく
ゆるすらよ末丁とひさやりてぬまへばい
とをりしうそてむきまつる。いとぢらい
きなほしりまてれだいかゝしことをくて
なかりしそさゝりられだ。うちまろハしと
まけらぬもそふりぬ程也。もとまぐ

ねハ尼ともふたらめ日まえ
えらびしく
すゝそあてまそ
なりらく峰よふゝよう
くれかとしく
細 ドギ
 鈍色
細 洞のあり
ゆうくこう
りせで今とも見だ
ぬかゝし お洞のゝゝ旧
もせでとよゆうく
細 みその比
とうゝも
なゝらりとうもし
ようとく 師尼よ多
しまつつせしるを見れ
ゐしこうとし〳〵河ハ川多

ところがみびゐのけぞどもとさうらなる
いまやういろめかしきのひくやさすあり
つゝぬけうつめりくてもとれくうさ
まづことのくちゞくすゑめうしう比し
げすらいでわるものすぞかくこそ秋
いとうそれもとうりなるまりかれかや
みくもまちすうとゐ上の事まぞく
と。ぬるぐさあれ給ぬれどうりぶつくまりな
きんちすゞ洞の人ぬまろさとといとうう也
ひとそられれすまゐうのとそよまなひあきる
さ西ぐよせのつうゝ日おしゝう見人より
うゝとかみもぐれやとおうあすけうなて。

とかくしてめがり
細 かく源よぬるまふとく
源と一向にめがりとあれ
給ふとくし 孟 源伺とハ
とめがりくるるてあるらば
女三の御心よりかくりて
御後ハ猶からしてみげ
うしくそしらうんと

衣のうり 細 源の兜まき
なれぞくしふるへよ何めひ
御しん竹のまみのよ

いまはとて見しまされんは、まそしきよ御
心とひとひをそ給ひつらんとて今ハしらうんは
うらみん見ゆべき事、わが衣ともがらどもと安 細 女の御しもとて世をそむきそめられたを
えまへど、うつさ御の人へりの衣もさ
らねりのとこてしとまりしてかりさ
らぬことみそいふえこと中べうしらん
とのまへぞ。細 源の伺 ひるのともや、めかりしもうるこ 細 柳木のうすたんてよおう
をありん抱とどもかりの給ふしてわ 葉之
君ぞとこまりまふ御めのとしらいなん 葉の乳母之
しもうす 源の乳母と かやもれ涙あらこうりぬ
給ふしいさて川へまりうへさんとそうく
御とのに衣ありはぞくすさ世よ御ひかず

やの心あり
らうあづき 細 王相ある家 孟 王氣付或ハ王家
まみとぬ 河 眼子 遊仙窟 眼中の様く

づきんはこそとてひぞこさとりの人へいで
ふやさくらこをてつみくてこく
あらうるくしとるねまどの御ちで御ひ御 源の心 孟 夕顔よ似たる
のりよめかり出つよと似給ひど女れの君さ 細 内之中文服の文の
ちらくらるりどの御ときさ御よくらけ
づきそけとうしこそ出うへしませこうりり
もくれくめそくるしも出もあひ出ぞと 葉之
いとおそするよそへておのそぞつづきすと タウトヒ之
のかりて思ひうるるまどといとおく
れとこ給ふひすよや、なる我いてうろめが 細 柳木よ似たり
えさらしいつまなりしせまるとなのとく
まぢ川りしろ御もやうしそなれぞく御か あの人よ様たりて

えがくまたひくおなじほ
細 楽天が句也。河海に
又これは五十八翁方
有後(ノチ)静(ニ)思(テ)堪(タリ)喜(ニ)亦堪(タリ)
嗟(ク)。持(テ)盃(ヲ)祝願(スルニ)無(シ)他語(ヒ)。
慎(テ)勿(レ)頑愚似(ルコト)汝(カ)爺(ニ)
白楽天自嘲詩 楽天五十八にて始
て男子をまうけゝり。故
に生遅と名付たり。其
ことを作れる詩也
抄 しかりといへどもおもひて
とりなどハ語してなげく

抄 女三宮ハ此事しろしめさぬ也
をりをかしきかほざまなり。宮はさしもおぼしわか
ず。人はた。さらにしらぬことなれば。たゞ
一ところの御心のうちにのみぞ。(源氏の心)
哀はかなかりける人の契りかなと見給ふに。(柏木のこと)
大かたの世のさだめなさもおぼしつゞけ
られて。涙のほろほろとこぼれぬるを。
けふはこといみすべき日をと。おしのごひ(今日の御祝義なれば)
かくし給ふ。しづかにおもひてなげくにたへた
りと。うちずんじ給ふ。五十八を。十とり(細 源氏四十八歳也)
すてたる御よはひなれど。すゑになりたる
心ちし給ひて。いと物哀におぼさる。なんぢ(楽天が詩也)
がちゝにとも。いさめまほしうおぼしけんかし。

又まさりげなき事ハ源氏の御心よりかりの生絹つるをなげりしくの事なげり此句の心也
ぬがちてま 細 楽天が句を引く柏木の事を下よの詞つる葉に對して実父より
似そしおぼえとらんと常に思ひやりて此心を御心にもちて此物語の詞の二と
をいふべきよし也 抄 楽天が汝が父に似たるなかれと給ふまゝ卑下なり。
源氏御心にハ柏木に似たるなかれと思ひしとなり
源の心 細 女三と柏木の媒也
このことの心しれる人。女房の中にもあ
らんかし。しらぬこそねたけれ。おこなり(源の心)(おろかなると)
とみるらんと。やすからずおぼせど。わが
御とがあることはあへなん。ふたついはん
には。女の御ためこそいとおしけれなど(女三をいふ)
おぼして。色にも出し給はず。いとなに(細 書也)
ごゝろなう物語して。わらひ給へるまみ
くちつきのうつくしきも。心しらざらん(柏の事しらぬ人は何と)
人はいかゞあらん。猶いとよくにかよひ

しらぬこそねたけれハ
おろかなる也とるべし
説くらひ
紙法とがあることハあへなん
何あへなんハおちるなんと
抄 女の御ためとがをおはせんぞ
媒しける女房などの
おとが顔しくらんハさ
てとがむべしとおぼ
しめさで
みゆいえん 細 書也
ものえ女の御為なる
しと源の云也 絡
ある紙編也
かうのいだんハ
宋崔かんハ源のはなれて
女三のうへ女三なれ

ゆやしらのそでよ
細 彼仕左衛門柏木の母上な
いとく所柏の子もかなき
と歎きかなしむ

うちゐるとこ給よ。おやこらのうざゐ
あれらしおい給しんかもえことぞ。人
きれなてうるみきうつくだらりをとらぬ
並ぐ。さぞうらめかりゆすけうり
しおとふりそうしまひつうよし。義よ
おしきれべ。めかしとやよつとひきさう
へしうちすうれまひぬ。へでもくうらく
世づる稽よ。文のゐ行よまりすてば人
とがいうこ給やうろ人と様てそむき
文そまぬべき世すやありぐる。おれらい
くしゆぐろうしことてまんじ。うれうち
わあく。おつきと

細 ちづ世より人がりおざう磯邊
の小松ちぶ世ふる万代うけ
て積ともうきらん。せまね
えたくまこうしといふべき
そとせ西白舟之助下る
いうぢいもんとうけて松へ
参んら紙え志しむべと
のくるる。えし
ひるよゆがむもえん 細 条の
行くる柏木をいがくれ
がそふんと係の忠臣
たてまつりしきのゆうと
おんまつて やむひいもやまいへ

係 ちづ世ようらねへまこしまくへとは
いつ岩ねの松へらくん。義すりるてぞ忠
びくしらこし給ま。彼へしもあってぞ金
卧 かしうてり。ことらまとお月をば。ぶろそ
まるこし給つむ。いつよはずもらん。へりのふ
うるかどいおいつせねどいりぞくへくかい
とまりうりととし給も。いとんぶるう
あん。ゐねの気へ波めまあすりて月のか
しあかりしと。いうかりうまよくありお
んもとしのゆりしうう海あうまし
ざいさえうりうらめそうりうしまい。いと
ありも気色とどてましとい。てようひある

(いのちの)とゞめがたく、おりあしくうかゞふわすれ(くもとりかへし衣かへ)
みもありしかれどゆめもげ見えつくて、
ちかくもしろしのまぎれよりもおもひてかゝる(細 柏木の述懐之)
しえしまひぬり、女宮のうへせとむさ(孟 女三の宮と夕霧の思ひ合せたる也)
まいるありさま、ゆかりくしきさるやうに
をおしそですらやうに笑しつらさをな(孟 速也 つゐにかくて女二の宮をいふ)
ぞかよまさまりともゆふしきてあるべき(源の心)
しくハ二条の人のさぶらひ限りてなす
くしかへさしとうつれことに
ゆかしてつねよりくらげにめづらかなる(女三の宮をゆるしまいらせぬる事)
よりのとまりしそりあかつてさくく(こまかに思案を廻之)
よ柏首しりてぞありもぞくくゑ志(細 柏木女三の宮にけさうしかる也)

二条の人のさぶらひけるから
かくあつくく見給
孟 紫上の女房のことをいふ
源の御方よゆるしまへり
しとく

細 柏木の所を云。夕霧乃
いとゞうりて見めぐりて
定むまそうしるひあはく
紫上を見給ひて我心
しりがおやみよう
しとけたべし
おつき雨 細 人ハ大夫
夫心すく八身をそ
てそらすかしあか
りのすり
つゞくも
何かしいとう思つき
るすみくる身よりあへ
きうありて柏木の心
ぞへとりぐさまぎて

のがぬおりしくをあはきさりいとようり
りそ見しめぐらさんべハ人よりけよ(孟 柏木の事之)
きあらのどかる何ずとこの人乃心の
うちよせふかんともかへもろうしさ
まくるしうどすゝよつき雨つさ(毛色よ好色をそくうつりへ)
てあひすきらしけぞりしいつく(かもめ之)
わりく ことさらかれしとよ心ぞまぎらはしく
しも身よかべきこしやかわりけれ
人のこあめもいとかしこう親王たちのさいて
づかしやうきすべきうらべき首の後しい(細 因果ありしく)
ひがひがしくもあらさるへき(細 雲井雁之)
こころしなずらひよらべど女君

はなしきも又まゐり
おかも柳木の逝去とうしあし
て深の御気色もみな乱
とくられけるそみえられぬ
べきなし
かくて 師 法服を借
うらに誰とへさしかり。
又女のさうぞくきて
ともわづらへたり
七日くのれどもござりけれども
常によろづの日数も失
かつてとらわり。柳木の七日
くるしきも父母八念おもひぬ
と人の気をつけてまゐら
うしたせんかもとく

まだれらくし出給ひけん、まかべきつかひぐ
あるそ、深ゆもきこゆし、あ給ハざりけり。
きこへけるしくとさえんふそめしとや。おさて
御気色もきまほしからん、父母とぐ母
少方八、深のかく海すく思しさ川ぎそえ。
かくくもぐ日数とと去り給つども。此ま
ざの佛かめぐいさくノぞく、おまくれる
いそぎとと、去り逝れけるくしりぐり
すんをさせ給まり。給佛のおさそるど
もた太弁の君をさせ給、七日くれたぞ
ぞやりあどもも、人の心くめぐりとみを。
うれよなきう世そくいへしとひま

かくなるよ海しけ 咒 父の
まゐるよなとうしそのへ
みそよの冥途の隙なる
べし
一条のふみよ八 咒 女三宮八
柳木家く 細 柳木よ深
後の対面するきしく

どうよ中く涙の御しげみもとそやさく。
あきらめりよ此かし侍れきり、二条の文よ八、
おしてあひつるくてまゐれ給ひし恨
さへそくに日比ふかきよ、ひろき心ぬれ
ちん、げらくなつくいおそげふくおもし
くつひあらくのひし人八おと給まりと
かしひさら、もこの御給しすむまる
ど、その心とれ、わづらひども、これ川く
承るかとらげて、きそくるよおへ遣を給
も、こよなかれて哀ハつきぬ柳よなるへわ
アきちりそつひ給しはでうしえつる
よひさ給しひは、和琴などのなかくより

花ハ何とうらみられぬなくさ
かくとなげあつて
仰つるの月花とみぐむ
るよハかるへしいころ
とつけてえ給ふべし

ふ得ぶの　細 若菜下地之
晄 泩のふくいでにも以
語類あり
弁の君筆ね　細　柏木の
見當なり　師よ何よさ
きとふてそろハ和がはこ
あらまさん人の紫のさこ
とくおろよてるんえをて
ふのゑハ給ふし弁・筆
柏木ハされをバとれ
ぬし

かぶりあれバ　柏木の歌を
ハその書逢釈よむかと
うちされど他人ハ別よ
まづきやしかれバ為惣
角をるもあつてよの
つるの人しぬけしく
てあるべし
されとのどかなりさき
細 秋も人もとまるぬ
せあれど若分のあん
かぶりハ苦云をやべし

（おんなの内ハ絃をゆるべるゆゑ）たちかやつされて緩とそてぬ・も・いと
（晄 絃人職よられてもれども）むかれいてきこまのまごい
こゝろありて花ハ時をまちすれぬ氣色
ありとなげあつて・地がれしくさつて如今
も・みびつるよやつれて・さびしうれぐ
なる給つてこされたるやうよみぐ篤じ
（此方よ事也）てこゝるとまりぬ人おりおもれ故殿
（きり盃柏して云ひしも）のれけもひをそこうわされてハうれ
とそうすくもおり大將殿のおつしさる（夕霧へ）（細）
つきりがれせつそこゝ紫しいれまり・倒の
（うしいきのけ筆ま花まや）弁の君・筆ねるをのおつしさると此折
（大和の事也）つるといしえつしげよ・こくのつるかゝる

れありてまつくいかゝまつわりやのひき（次のアリ）
しよおゆかしくそのくいれなすうよる
べきるかよ・人ぐのおへちつくひときえ
んハ（おもしろし）うけうさ海のしまうれぐ・此（細 落）
（柴また泊舟く）息所ぞよひめるまつる・いつかれとをと
まへるげくちてろいさるべきへぐめとて（細 夕霧の自 柏木の事を云々）
えくたぐれど・恨あれバきてしさせや
りくさそてよのつるよるかりにそり・
（細 一条の宮の…）いまその河ぐふもの身ひ悪しと侍りふ・
どうするべうん・紙をのとめがくさせ
すれど・きくれさんよつ絃のかぶちよ
ハらひまつてきよかんまちうがいくヽ・あるき

紅梅 細二月紅梅
かしこげなる所二
月の余りなり。年中行事
にみえたり。又二月
ぞりあるべし
あさ夕のちかづきに
梅中の紅梅さかりなれ
秋のくれしぞ行ふれ
まかりて出仕をやめん
まうけ御まうけなるべし

心の様なとはなやかなれおかしうおかしくなん
紅梅のにほひのしげきころ御ひつのあくる
のこるかぎりよきさまにてつくしたまひ
るはしんも心にあるかぬしたまへれば
まかるありしさまにくよわきをこのみ人
らるべうもてなさん。思ひなりすずしく侍るなる。
物ぐるほしのかくれにほふ給ふ梅の愛
侍るよりけるも。秋よりのはなやかにとかざる
りのめでくうかがはしきひのふるく梅ひとど
先人よりかへりさん給ふとなてもちのこそことし
するはいでつきなどにちなんてあはれくれと
しのびかへるを折らく給。わかやうなまけうれ

文よりけりのかう
細 藤榮の家乃紅梅也
哢 女三宮の歌のかう
さくにほうまき
哢 柏木のおもく。又女三乃
あやしくなりまかする
ことゞ 五月

めのしぼりしらそ梅めづらしきや
を見そなたれ声よ似まて家なるは。
そのつゆ折りさ世のさかよてそハつげし
てと。又さびひすさくしゆやかて。ま
りかめる人ハあさるそところつつる梅
し侍ると。家をお得しいるこ梅のハ
とゆきまきまぐるとれもしらそく
是給まぶしさやまつし侍れハとんて
いてらうつうけり身の。梅まそあり
らんはくうくかくよそれと世の意
のなるとき梅ところぐろやと。
いとよみかんすたん。とのづかうら

しめつけさん
細 此文格子よおづけまふる手本をとつてあるらしつくむら 唯 梅まのうへハすまざりしとぞ

すゞしの 細 小島ホ乃かの名をぬりやしめりひしをかし 扱設仕の鉦まやかむ朱雀も此同じく紙は別の及ばぬちるべしと云ひて同印せしとぞ

ゆゑぐらハつらくもあらびく 細 ハ手ちらんづくいひとかやさんすらものとそく
それもかやうめしも
細 それもうく早世あるべ

かきけるうしひめくらて よよひを給
やうとゆゑんらじめつてこちらたうく
うけひをさをのふゞるうしれ紙ゆとの
れんむけもゝぐうし流 盃来く ゆもまうく
さやうよ山がりしゆうつるれ気をやどの
作しばさしまゝづつのゝそとさ
のとをすぬぬそりしとそつまいそうて
をんとすりつうとうく芳のやうたり
しし紙とかまくとよえゝのへあそくれども
うしのこころ書洞しもんゆかつりハつ
ようをもあやびへゆゝしまつとこひ給
ぶよれいくしとうやうそれをゝやゝゆ

きとくいりのくらぶひめよハあしはしく
こうすらハ 細 此ミゑさちハあろらよますの定てきのふ手本義と云くずうむしりてやせしくぞらりく
いつくふとを 細 中ぞうたらく 愚ひとりずとざまりあみつそとそあるかりせども又すぎさて給つくしる中空みとく燈あを出すれ給さんおみも立ともれあへまじきやうふとあれ安二文も此此ゆもひよこきえうせあてもれしうらね此身のさ雨ぞとえ我を云ひのふ衣えさうとそてもちうもうやをゑ おゆ女とおふとそも欽のくまハさのうにそこやくる女二のうせの二んなき御涙すくこと

とさらゆくざりさうしとこてくらは
ゆかろけのふしかうそでおしみをとらくも
らやうよおづつさ給しとえんみくう
ぬうしふうりとふうめきこころよハと給
しとづつさふもよりし中ぞうまよう
きれてくをるうちそれハおすよみのつね
でよ燈みつとすそれのひろんハこの此身
のさあ人ぞてなりはそうよくらあし
うろすじそれどさうとそてもちう恨や
うよえ云ひもろむまじうゝすうゝを
つるゆりよいとられうあさうしぬ此
とうしひの哀くよあり給めへとおり

[illegible]

一 え[illegible]ひ[illegible]何[illegible]ず[illegible]く[illegible]やうハ 孟 速[illegible]く れ[illegible]つくろひの[illegible]く 細 夕顔の[illegible]り[illegible]て[illegible]今[illegible]じめ[illegible]すり。[illegible]人
[illegible] 哢 円
[illegible]ハ[illegible]おりよきそ[illegible] 句 愚秘 おほよ夕顔の今ハ乃[illegible]のあひそふ
作し[illegible]よ[illegible] 善[illegible]
[illegible]夕顔の[illegible]人
[illegible]彼柏木の[illegible]
[illegible]

細 柏木ね生の[illegible]
[illegible]
遺言[illegible]
[illegible]花 故[illegible]
[illegible]二家[illegible]中[illegible]
[illegible]今ハの[illegible]二家の[illegible]
[illegible]遺言[illegible]
[illegible]も[illegible]
[illegible]行[illegible] 孟 月

[illegible]

細 無常の[illegible]世
[illegible]
人ハとく
[illegible] 細 明[illegible]
[illegible]方[illegible]道[illegible]
[illegible]
[illegible]
花 日記 一説[illegible]
[illegible]
[illegible]花やう[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]著
通の[illegible]

の[illegible] 細 柏木
夕顔[illegible]年の兄
又 師 夕顔[illegible]八[illegible]

[illegible]

(こ
れ[illegible]おはしましかば[illegible] 柏木の[illegible]
[illegible] 愚 細 花 説
[illegible]
これ[illegible]つげ[illegible]
[illegible]
ハ[illegible]
夕顔の[illegible]推[illegible]
い[illegible]
(ま
らひ[illegible] 細 夕顔の[illegible]
[illegible]人の[illegible] 細 柏木の[illegible]
孟 [illegible] 早世[illegible]
二三年のころ[illegible] 女[illegible]

[illegible]
の[illegible]
人の[illegible] 花 [illegible] 花[illegible]
[illegible] 細 遺不及の[illegible]
[illegible]
[illegible] 夕顔の早下の[illegible]
[illegible] 細 夕顔と[illegible]
こ[illegible] 細 [illegible]
と人[illegible] 二家の[illegible]夕顔の[illegible]
らん[illegible]
[illegible]
やう[illegible] 孟 [illegible]
[illegible]年の[illegible]のこの[illegible]

あひ見むことハ 花イ ラフキス

ことしばかりハ 河 深草の

野辺のさくらしこゝろ

あらば――――

あひ見んことゝ 細 こと

じ世の命ハつまくし

さとしてもんじゝ給

つ夕霧のみそ落葉

の家を念じらにうつてお

ひそんとゝおもひつゝお

りんもふかくこそかゝりけれ

とき きこえよ花のさ

かりハおりあめどおもひを

人のハ命なりけり 躬恒

かれハかりねとゝ 孟夕霧の 説

あ紙いとゞやうやう御めさ、あひしられて

物しおひしられていとすくよかなるを

くちをしくおぼさるゝけはひしてうちのぞ

いとまうらうらしうなりにしこと、人よそにれ

まうでつゝハ御とふらひしきことすけりし

ますなれとをいひつゝすゞろに御前ちかき桜の

いとおもしろきを、ことしばかりハとうち

おぼゆるも、いまいましきすぢなりければ

あひ見んことハとくちずさびて

時しあればかはらぬいろににほひけり

かたえかれにしやどの桜も

わざとならずずしなして立給ふにいとゝう

前へ 咲ちる花のゆくへしらねバとハ

ちる事を柳木と二人の一人かれ

しらぬ 喩

この君ハ 喩 詩 息所のこと

よりの名をしたがひぞと

八月よ頃の事をよせて

言 息所此君ハ八月よりのこと書

て花の上をかへたるにしたがひ

としかり 河 滅ことどりの

系よりうけてたのし家と

ひみもねかの君の物

出居ハ広庭へつゞき

奴のけうよりも 細 親

の喪よりもなほつゝ

らやつれたまへる子

このきハやなぎのめにぞたまハぬく

さきちる花の行へしらねバときこえ給ふ

いとふかきよしにハあらねど、いまめかしうかど

ありとハいはれ給ひしかういなりけり

げにめやすきほどの用意なめりと見

給ふ。ちじの大殿にやがてまいり給へれバ

きんだちあまたものし給ひけり。こなたに入せ

給へとあれバ、おとゞの御いでゐのかたに

入給へり。ためらひて対面し給へり。ふ

りがたうきよげなる御かたち、いたうや

せおとろへて、御ひげなどもとりつくろ

ひ給はねばしげりて、おやのけうよりも

のこる所なくハいとさま
じきさまなり。惣て
此大臣ハ三条宮の事も実
よ昔をしのばれぬ人、
きらふかりてうくかろ
すかへし 師 此ゟ者に
此後もの昔ゟをかき
ふえあらさんくとし源氏
の夕霧に宮ひしかする
とふる猶らあるへしき

こうぐらよりの御の
御返しと云の此所をさて
うかぐまに云まかし

げにやつれのかぎり。もえしのびたまへりつと悲び（此夕霧の按察使とて別て柏と云あらく）
ぐさりれハおほかたはおさまりしてたまはせれ
おつろ源氏ぞえしさうけきとぞくとあ（云々そ）
てぞいとうくし給。なんとしもいらわさそ（のこるそ）（按察使のなへ夕霧と柏）
れ中うく拙しのひしとことのふまへあく（本と中ふうりうるとく）
わりよう落て。えうとめ給へど。涙さ
をぬれてしくりをきうしうえし給。一条（おち 夕霧）
のこやよまうてうりつおりさ涙すぎ（のこるまうて一条ハおち葉の宮ともの事）
きえし給。いとぐちくまかりしとこゆうすぞ。（按察使の落涙の事と）
新の霊ゆへてすんど。めしそへまふで（のき）（云く）
うぐとまの御。のめるぞとおりへりと。（落葉の母君の事）
くいらへすとすりうへいめくとえんてもとやと（按察使のと）（柏木へ）

此おハつくとあるつまよ
りの御の日ふぞみとかく
とあるを按仕のるそぎ
まとひあわせまって

女ハうぐさりおりうく
お女ハおりて。へおねれ
ぞるまふれてさひお
うき事のそくうきことく
思桜あつひのとのすま
つきて柏木のその悲嘆
わりきうさとのるて

とりおりつてき給。うらひとぞ。つくさ（按仕の大かみ事と夕霧のなく）
給はさ泪まへいたしうろづううわざやり
よ。おりへうるけうしさすぞりすく人
まうしきらいなりしゆうかれど。此（此息所の御事なるく）（息所にもをくかうるうひえ）
むそめくとおりうの。げよとおぼさう
うまふきれく。ひさしうえうろ
ひ給つど。云のけらく云のうくれすすり（細 按仕大臣の御落よあるく）
し秋うん。ようすのきくとのきはよ（降涙と）
いかげし給ど。女ハうぐざりおりくうろん（うふろく）
そくなう。とおりてそもうろうとそお
らいなくね。ハうするひもうくろへてるん
おりきろ。なろくしうくねど。おぼやけ（ぞよりの柏木のこく）

はかなき位をつけてめひ
うのむ人へく 一説云柏
木ハ執柄の息なれハ家
位のなきにつきても
執着をとゝのむる也
柏園ハ家礼の家として
まなかとハくやうのるゆへ
からふみさねりひハ
哢 柏木のかみゝくるあげ
くハ位みも何あもうち
はみるかなくうちくう
なりしを思ゆふくく

ろうしとおもふさて
哢 大宮ハ悲しきくんのとき
ミクハ抱柏の～へしゐるなり
めくるらん

さきそてし涙をんぐやさしく人とすりは
かき位よつけくおひとのむ人へくをのゝ
くしつきくよ地わらすりみどうしき〔柏木のかせしらぬを〕
地どろさ口おしくらも恋いよゆれてあ〔細 衣ハ家位のすゑに〕
るべしうつめつきさひハそのえりさのよ〔ありわすとく〕
の覚しをつきき位も地すわしきてこ〔うい其のえ命の有ひ之〕
とおつしとるりしとりつゝのあり
さ海のさこそ人かそく恋うりきれ
すよちらのくしみくくハさひさほそ
べりんて雲ともふきてすゝめ給夕
夢の雲ゐ見えもひらうちころて〔三十六〕
花のちりしる楕とくも、くみぞめとく〔行夕霧のけむとよりて之〕

木のえうさの 細 子の服
始よさうよ修くるなり
うてこ是ににせうり
哢 叙の子の服を思ひて
さるの多備く今もそ
ふなり
ちきんと 細 柏木とと
みけきなるさとし師夕
の霧と小舞除のらく
見えきされて思ふしハ
地をりどとなり
こしやや 細 衣奴のせん
どの是とそらもとそ
うちし師られさまハ
衣よ服衣をもせ給を
さうろうて

め給このわくらぐゑよ〔細 此ハ皇后の前へそばゞよまえてまかりて〕
木のさくこれもづてよめれくさう海〔後撰大后宮ヨ之〕
よ霧の衣さそつるきられたゐの恋
夕 すき人もあてぢうもんらちて夕〔花 紅梅のえ后あるべし〕
のもとき思きこれとハ弁の君〔紅梅の大臣〕
うしあしや霧の衣新さうしきう〔双紙地之〕
さ給よ花の数らん伯わさるみどよのつ
すれいかしうかんきもうろ衣の〔細 雲井の雁也〕
小方ともいさる袖ふくしのくろうしく〔細 夕霧へ〕
よむ経をどしも衣よふさくらんそ〔於 衣裳をも夕霧のかたへ〕
ゑく給ゑの一条のゑよふもつぬよよ
らひきし給卯月さりの衣ハそこ

一村薄と 河 古今 君がうへし一村薄虫の音のしげき野べともなりにけるかな 抄 前の むしの音そへん 引哥ハ虫のねしげきと也 べしと也。今ハ夏なれば 虫の音そへん秋を思ひやりて いと面白し 花鳥

の説ハかくのごとく 抄 衣なれば虫のねそへん秋 はかくらんと 細 先代 果守侍正 夕霧の一条 薄ハ虫の音を りん秋風ぞ吹とあめ るとある也 細 衣なれば 絶 御悩ましと也

いよすの 白きハ 竹の皮 あみたる也

こゝちよげに。ひとついろなる四方の梢も。おかしうみえわたるを。もの思ふ宿は。よろづのことにつけて。しづかに心ぼそく。くらしかね給ふに。例のわたり給へり。庭もやう／＼あをみ出るわかくさみえわたり。こゝかしこのすなごうすき物のかくれのかたに。よもぎも所えがほなり。前栽に心いれてつくろひ給ひしも。心にまかせてしげりあひ。一むらすゝきもたのもしげにひろごりて。むしの音そへん秋思ひやらるゝより。いと物あはれに露けくてわけ入給ふ。いよすだれかけわたして。にびいろの几帳の衣がへしたるすきかげ。涼しげにみえて。よきわらはの。こきにびいろのかざみのつま。かしらつきなどほのみえたる。おかしけれど。なほめおどろかるゝいろなりかし。けふはすのこにゐ給へば。しとねさし出たり。いとかろらかなるおましなりとて。れいの。宮す所おどろかしきこゆれど。このごろなやましとてよりふし給へり。とかくきこえまぎらはすほど。おまへのこだちども。思ふことなげなるけしきをみ給ふも。いと物あはれなり。かしはぎとかへでとの。ものより

ごらんずれば 夜 めめすゝハ子
まぶしとハるゝくらし祭
なるの花く志へ巻よこま
るし 細 らくのごくしあゝ
ごとく柏木とくいで乃
やうまゐりて称てわ
らかし称歩つ巻のゆゑし
わゐしとやつさとえ。
かゝるの花柏木にあり
と基俊の歌とさらく。
新古今名 時しあれ
名ハかゝるのくもゐ月ま
げしまうらね森の柏木
師 柏木の夕顔よ今え
いつのいまひとさうしと
とうくハらくう
みしびもそこ 細 夕顔ハ
くるまひゝら方もわ
それらさうし 是一様とる

夕顔のさかりしさくもにひらくもしくのりよりけひしてあかりしわりがら
しび宿も赤あとやごしとく
うつまに 細 御息所のゆゑあるべし。此説宜
くもゆうしハきまじきてしく 後撰集巳の大臣の絵巻と似せてかくなり 哢 此説宜
を承るりくべきされ 私 女二宮かりへしえく 師説 女二の宮かつり 河 後撰よしこ 我宿
とゆゑらしてくるつの宿のまゝしづかみえありよみこそろゆ 枇杷左大臣 柏木
よかゝるの花のまゝしかりさうらくぞわしくるまされ

（花鳥）
けはひやうかはりして扇さしかくしたる
（夕顔の句也）哢 夕顔の女まよひかけ給ひしこと 連歌の心也
といふすぢよりうすゝめへるゝめり
さよるごのすそおのびやうよさうり
（枝と枝のまへのまゝつ）
く
（夕顔 ごとてまかなへ之）
しらすしハ宿（枝と枝のあひだるがすゝしの枝之）しの枝よみつきさるん祭
るの花のゆふしありさとぞすのしのへ
ごそあはれにてそうしあしなれとく。
すげしよりねまつり。すびもさ
とくいつしさやぎけゝやと
これみつにこの西なる家は何人のすむぞ
（女二宮のゆゑ）
みか。かねのさとゝへて
哢 落葉 細 御息所
しる木は家るの花ハまくずいもん

すゝすべきやどのまどひふらうけれ 哢 此説宜 我宿の花
（柏木よりの哥 師 かねまるの句 此 柏木）
の許ゆきゝし落葉しけて猶しかりと
れしまの宿よらん。おきうらものへすりぬる
（夕顔のゆく）
とこもれど。げよとゆかりてよ。すとし
（夕顔の女く）
ゆくもとしすひぬ。御息所とてねざらう
細 御息所の句
あ絵けらひとれはやとしぬるそら絵ね
（月星の立まし）
うき世中をものへもらひ月日のつりうらぶ
（夕やよまうすとのまつ）
めまや。さつらぐらもおやしうぶれぐ
ちとてるう御絵ぐしびくなるみさせ

けさうして　花　夕霧のさはす
之哢　女二宮のうへを夕霧
のかたへむかひてのたまひ
少将しく／＼
哀ぞよいかなる人かゝれ
おほ夕霧のかたは女二の宮
とおもひやる也　細　中宮ちかう
すまひのまゝにと　師　柏木にわ
ひとつふたつまさるまじけり
しまひ別きくる也

給はとつゝひのゝしりけるをさへよ。おもふ　れ又ま
へのうへてかんとそ。げによるやましげなる　ひゆへによりきて也つらんと
れひとひするり。ありしすげくたゞ世のこと　細　夕霧の所
ちかすれど。又いとやんごとなきいづれの　さうざうしきいそ　数多人をさし
しきさうべきよこそは待かれざすなり　細　いろ／＼類も混　孟　当世の葉団とく
わか物とし　くだりわかるゝよるかへるをさうめしかふ絡
此宮へそなたしたり。公のおほやけ人しあ　かうそえ　いまいまこしがけれ
へ。哀ぞよいかなる人かゝれるかくなど。
しらそへてすゝすみんとおもひなりこそかふ
ねがひつゝみかじめそ御心さ絶も入　夕霧ふたりひとびとゆへ宮に向きて
ちらし給ふり。さらぞいひつねりは　細　女三宮の形見とも給ふ
え。の絡すれど。かしこまりしかるに

ちかうさぶらひなれしはとかく世にもすぐれ
ちかめよりも人ともおもひわきまへさか　女三の宮
まづきつねとももてなしつくさぞ海め
しや。さきんだちのことそ。いひりそゆかん　かの物語とそ御むかし
よいは。御んずしさうかへれともがて。今　細　夕霧
枕音よおりしつそへてさとり　の御柏木よりかけなつかしくそ　いはきりけれよ
ぞうそかさせのへるいとはしとけきう　柏二の宮に思ひかけれ之
びてはいとねび給ふところよ殊にとそ
てきてし絡すやすぐさいひもわさから　夕霧の柳之　河　大小こけのこ
みくふけぶらりのくさう。そこうらよ
ぞ見て給ひて彼女どもいとりのしる　花哢　源氏の孟　道遥院は柏木とかんこう
つゝうする海めきおてよおのいぞやうつ　しきりに

なまじくうめる　細　世の
人をといひかめしくめで
世との二ちり。此二ちうぞ
いとそなるべかれども
愚按　是は柏木の此女二宮
をさまで思ひてしるなり。
めでたく夕霧のおもひ
かく見若く寵るかのか
あかる物の不足ちりとて
るぞてあひわくつきるぞ。
また又さ　まだ此女三宮
あがるてかぞしてかとまぞ
いとうきそぞ
のやぞ　細　源氏のすゑ
しきく今上柏木とかく。
の御こといふんさみそだに
そしとみよつきそ源と
元かく也は柏木のすゑ

みくるべし。此院の
女房も源氏を見まゐら
せしもおほかりき。され
ばこそ柏木るいもなく
とぞ

細 蘇 草初テ
ゆきのまへぐん
秋しのぶをおもひしと
うらみ給ふかく。前よ
庭とりかくれきと
初ノ若菜の巻にも
とありぞそのくるひ
人のよく柏木も金吾
将軍なれどいとう。
河天與善人吾不信右
将軍墓草初秋ニ此在旨
右大臣保忠のうたを他将
詩ハ菅丞相時平ハ息。仍テ
此詩の代りとて此韻字平
詩は秋しのびと今改め
て是を誦せられたり。
是心優美なる也之卯月
の比なれど。秋の字をふくハ季節お遠きて。秋の字をかへ
さらうば眼前の景気もうつり下略
以え右将軍といふよ。相違なり
それもいとくちきせの 細 今古おかし
あるうとぞり
まてやきて趣しくきて近
たゞ此人をおもむくく

さ給へるこのすゞしびるさまり。これは
女房
せちうるやうよ。おほえくしとのと
きの給ひぞ。人よ似ぬやしらうこしめ
ゆくなり
きてかみじうハやうみちくも。お入給ふま
まいるの
しりぞるすべてらふやり。右将軍かつ
まい菊とめくおもしらくらゆずき
ひくそれもいとちぐさ世のことなれど。
さ侮ぐらうへるへぐるやうぞ
つまし世中よささきをくずれるも
河 慌惜むべし
とおくしげぬそれさよしく
元稹施のうた 有獄ヲ輪
しもさきを いとりのふくおやもう
細 人よに怨かりし
すきいそきさる人もうそ柏木を給ぐれ

おどの卒ふうめきうとえさん。然る
しひきうあきそらんよハ出従るとの
細 今上の御琴の師なり
おりとくよ。まじ川はびし出そるん共の
ひくとひめり
おもふ給ひの。おそれ恐るのといふこと
くさなるまよつけてもいうぬんなし。
六条院にはおして表とゆがし出うこ
と月日よそくてゆかりとのかりそめをせ
れころひとり川よ。いうそことこそあります人
人ハおもしめとこく

ど。人のおもひよらぬことなれバ。いとくひ

なし。秋つくさよみなれバ。この業ハいとゐざ

細例の事とあ

すさいの字なし

なり益などせむとのみにて

つとむるなど

国立公文書館
National Archives of Japan